

1. 背景とねらい

きゅうりうどんこ病は、きゅうりの最も重要な病害の1つであり、夏秋きゅうりでは7月中～下旬以降が最重点防除時期となっていたが、近年発生が早まり多発している事例がみられる。本病の防除にE B I剤が使用されるようになって数年経過しており、一部のE B I剤で効力低下が指摘されていたが、本年主要なE B I剤について全て効力が低下していることが確認された。これが重要な多発要因であると考えられる。また、ブルームレス台木が本病に弱いことも指摘され、本病に対しては新たな防除対応が必要と考えられる。防除対応については未検討の点もあるが、当面の対策を示し指導上の参考に供する。

2. 技術内容

- 1) E B I剤は本病に対して効力が低下している(表1～4)。
- 2) 近年初発が早く、多発する傾向にあるので、例年多発している圃場では、6月中～下旬からの防除が必要である(表5～6)。
- 3) E B I剤は、他剤との混用によってうどんこ病に対し一定の効果が期待できる。ただし、混用にあたっては他病害の防除も考慮して、ダコニール1000やユーバレン水和剤など抗菌範囲の広い薬剤と混用して使用する。また、ベフドー水和剤、モレストン水和剤などの系統の異なる薬剤と輪番使用する。(表3、4)
- 4) ブルームレス台木に接木したきゅうりは自根に比べ本病に弱い(図1、2)。

3. 指導上の留意事項

- 1) 6月中旬～7月中旬はうどんこ病の他にべと病も防除対象となるので、この点を考慮にいたした薬剤の選択が必要である。7月下旬～9月上旬はうどんこ病を中心とした防除体系となる。混用例を表6に示した。
- 2) 草勢が弱まると多発する傾向にあるので、適正な肥培管理を行い、草勢維持に努める。
- 3) 薬剤の到達性をよくするため、葉かき作業等を行い、過繁茂にならないようにする。
- 4) 伝染源対策として、被害茎葉は焼却処分等を行い、圃場衛生に心がける。

(参考) E B I剤(エルゴステロール生合成阻害剤)：各種のうどんこ病やさび病、果樹の黒星病、赤星病などに高い防除効果を示す薬剤。感染から発病するまでの期間(潜伏期間)内の早期であれば卓効を示す。現在11種類上市されており、その中できゅうりに登録されているものはパイレトン水和剤、ラリー水和剤、トリフミン水和剤、ルビゲン水和剤、サブロール乳剤の5剤である。

4. 当該事項にかかる研究課題名

野菜病害虫発生予察事業

新農薬の選抜と実用化に関する試験

5. 参考文献

昭和55～58年度 園芸作物の病害虫に関する試験成績

植物防疫44:391～393(1990)

植物防疫46:410～414(1992)

昭和56～平成4年 植物防疫事業年報 岩手県病害虫防除所

6. 試験成績の概要

表1 きゅうりうどんこ病に対するEBI剤等の防除効果(平成4年)

供試薬剤	散布前(8/3)		8/24	
	発病葉率	発病度	発病葉率	発病度
	%		%	
ハイトン水和剤*(×3000)	49.4	12.5	82.3	56.7
ルビゲン水和剤*(×10000)	32.6	8.3	84.7	35.0
ラー水和剤*(×8000)	31.6	7.9	67.0	25.7
トリアミン水和剤*(×5000)	25.3	6.4	49.7	18.6
ハイトン水和剤(×3000)+ダゴニール1000(×1500)	26.4	6.6	37.2	10.4
ルビゲン水和剤(×10000)+ダゴニール1000(×1500)	22.2	5.6	22.9	6.1
ラー水和剤(×8000)+ダゴニール1000(×1500)	30.3	11.7	28.1	9.5
トリアミン水和剤(×5000)+ダゴニール1000(×1500)	31.4	8.0	15.0	3.9
モレスタン水和剤(×2000)	34.4	17.2	57.5	17.9
Zホルトウ(×500)+ダゴニール1000(×1500)	18.0	4.6	22.2	5.8
ハフトン水和剤(×500)	30.4	7.7	18.3	4.8
無散布	37.1	9.3	83.5	45.0

*EBI剤

播種月日:5月6日、定植月日:6月16日

散布月日:8月3日、10日、17日

供試品種:南極1号

調査方法:1区当たり5株の主枝展開葉のうち、第6葉以上の全葉について発病程度を調査した。